

おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

—そんなに多くはありません—

NO. 110



あんずの児童も放ディも、日々いろいろな活動を組み合わせて取り組んでいます。身体を動かすことや手指を使うこと、机に向かった取り組みや、触れ合い遊びやゲーム等、同じことでも取り組む子ども達の顔を見ながら、取り組み方を加減調整したり、道具を変えたりしています。それでも、同じような活動が続いたり、子どもが飽きた素振りを見せたりすると、“もっとメニューが欲しい”と感じてしまうこともありますよね。

でもね、自分達を振り返ってみてください。子どもの頃の遊びやグッズって、そんなにメニューが多かったでしょうか？ メニューが増えるというよりは、次に発展していく流れだと思います。

例えば、『かけっこ』を見てみましょう。最初は、走れることが楽しくて、あちこち走り回り、次はお母さんまで一目散、次はゴールまでの徒競走、それがリレーになり、マラソンになります。大人になれば、それを趣味や仕事にする人もいます。そう思うと、生きるって、なんだか壮大ですね。『ジャンプすること』は、その場でのジャンプから、少し高いところからの挑戦に、そして繰り返しジャンプできるようになると、巡り巡って『幅跳び』や『縄跳び』に。つながっていますね。『ボール遊び』を見てみると、転がるボールを見るのを喜んで、手にしてみて投げてみて、投げたボールを受け取ってくれる楽しさを覚え、次は双方向のキャッチボール。蹴る楽しさを覚えたら、サッカーゴールをめがけるように。そして、バスケットボールやバレーボール、ボッチャ等、遊びが球技になり、自分でやるだけではなく、誰かが上手にやっている姿を、憧れの眼で観る楽しみにもつながっていきます。

『ブランコ』や『滑り台』も、揺れたり滑ったりするおもしろさは、身体の操り方や動きのイメージの膨らみに合わせ、日々変化していきます。公園の遊具がいつまでも変わらないのがその証です。

オモチャって不思議でね。一度飽きても、数年するとまたブームが戻ってくるものです。遊びのイメージの仕方が変わるんですね。捨てないほうがよいものもあります。『プラレール』が『鉄道模型』に発展している子もいます。大きなブロックが細かいブロックに変わり、イメージの持ち方が豊かになっていく子は多いですね。同じ手先遊びも、子どもが自分で進化させていきます。

スキンシップ遊びや感覚遊びは、身体が大きくなると、付き合う大人が持ち堪えきれなくなるし、遊びのスケールが大きくなりすぎると大変なことになるので、小さいうちに、繰り返し、繰り返し遊びこんでほしいと思います。また、違う形に変えて楽しめるよう工夫していくこともできます。

因みに、児童の活動は、大まかに数えても 100 以上のメニューがあり、一つひとつのアレンジを含めれば、バリエーションはほぼ無限大になります。放ディも、自由遊びのメニューまで含めると、やはり 100 以上あり、子どもが自分達でもアレンジしていくので、これもほぼ無限大です。

目新しさに、目を奪われるのは大人なのかもしれません。飽きない程度に変わらないものを、子どもの興味関心に合わせて回していくと、その子の育ちを引き出すことができます。本人も慣れ親しんだものの中からだと、新しい何かを見つけやすいかもしれません。

“いつも”に飽きても慌てないで。この先の“いつも”につながっています。(R 7. 7) K

